

秋の D-1（だじゃれワン）グランプリの練習会が開催された時期からは、だじゃれを楽しんで作品にする学年が増え、1月の校内 D-1 グランプリは盛り上がりを見せた。

③国語力集会と『聞く聴く名人への道』の活用

今年度は国語力集会が毎月行われた。体育館に入場前に聴き方の自己目標を立て、集会で校長の話の聞き、教室でふり返りを書くという流れが主な活動であった。



教師は、『聞く聴く名人への道』を活用し、子どもたちが自分の聴く態度の段階を意識し、より具体的な目標を持って集会に臨めるよう促した。

しかし、発達段階によっては、子どもたちが明確に目標を持つことが難しかったり、表自体がかなり長いスパンで聴く力を育てていくことを前提としたものであると考え、『聞く聴く名人への道』の表そのものをより使いやすい物へ改良する必要性を感じた。

④聴く力の指標作成

『聞く聴く名人への道』の表だけでなく、目指す子どもの実態をより具体的にするために、「話す・聴く力の指標」作成に取りかかった。こころづくり部の行動指標と同様、3つの視点で A を望ましい姿、C をなくしたい姿として作成をすすめてきた。3つの視点とは、「聞く」「思いを持つ」「話す」である。低・中・高学年に分け、発達段階や実態、国語の指導要領の目標などを総合的に考え合わせた。

しかし、完成には至らず、学年部間の調整、具体的な活用方法については、来年度への課題として送ることとなった。

3. 家庭との連携

①『家庭学習のすすめ』配布

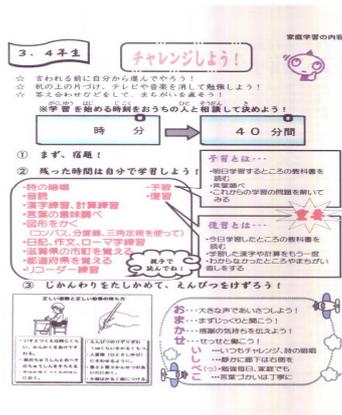
学力の定着には家庭学習も大変重要であり、各家庭の協力が必要不可欠である。家庭学習の習慣が定着するよう『家庭学習のすすめ』を作成し、配布した。

表は保護者向けの文章で、家庭学習の重要性と協力を呼びかけており、裏は子どもが毎日参考にできるような内容になっている。

一度配布し親子で目を通した後、親子で話し合っって学習開始時刻を決め、記入し、担任へ提出した。担任はチェックし再配布した。

子どもたちには、家庭学習の重要性と表の活用法をオリエンテーションの時間をとって説明し、よく見える場所に保管するよう言って配布した。





家庭でする学習は学校や塾の宿題であっても家庭学習とし、目安の学習時間までは自主的に学習をすすめるよう指示した。低・中・高各学年部ごとにアドバイスの自主学習の内容を細かく記載し、発達段階に応じて自主学ノートを作ったりしながら自己に応じた目安の学習時間確保をよびかけてきた。

また、はじめを持って取りかかれるように学習開始時刻をはっきり記入させ、学習環境を整えるよう訴えた。

裏面は見えるところに掲示して毎日活用

②家庭学習実態調査

夏休み前の配布から約半年、12月には家庭学習の手引きがどの程度定着しているのかを実態調査し、個別懇談会では、全保護者と個別データを話題するようにと共通理解した。

【調査結果】

(はい) と答えた%

	低学年	中学年	高学年
●家庭学習のすすめはよく見えるところに はってありますか。	47	39	55
●学習時に音楽やテレビが消されていますか。	72	56	55
●学習開始時刻が守られていますか。	55	40	24
●宿題以外の学習をしていますか。	61	65	72

○考察

ほとんどの担任が、調査をして、個人差を感じたと記述していた。個人の宿題を終える早さだけでなく、保護者と共に学習しているかどうかや、塾や通信教材の有無など家庭の価値観の差も大きい。しかし、今回『家庭学習のすすめ』を配布し、繰り返し家庭学習の必要性を子どもたちに伝えたことで、意識の高まりや自主学への意欲が高まった子どもも少なくない。

全校のデータを見ると、学年が大きくなるほど、型にはまった学習スタイルに乱れが生じている。放課後の予定もばらばらで、毎日定刻に学習をするということが難しくなっているということだろうか。ただし、テレビや音楽を消して学習できない事に対しては、決して軽視せず、繰り返し学習環境の重要性を伝えていく必要がある。

しかし、同時に宿題以外の学習ができる割合は学年がすすむにつれ、確実に増えて言っている。塾や通信教材に取り組む子どもが増えるということも原因の一つとしてあげられるだろうが、与えられた課題だけでなく、自主的に予習や復習に取り組める子どもが少しでも増えるよう、家庭とさらに連携を深めながら子どもたちに働きかけていく必要を感じる。